論説　都市計画における土木技術者の役割

松井達夫*

この標題は全く土木学会の編集委員会から与えられたものである。そのことについて学会から電話があった直後に，かねて注文していた書物がアメリカから届いた。その本の標題はまた "The Civil Engineer in Urban Planning and Development" というのである。これはまさに偶然というべきかも知れないが，またこの偶然を生む時期にわれわれは際しているというべきだろう。この書物は一昨年 10 月に ASCE の都市計画および開発部会がプエルトリコで持った会議の報告書であるが，アメリカの土木技術者もわれわれと同じことに関心を持っていることの証左といえるだろう。

議長の開会宣言にもあるように「土木技術者は，その学校における訓練と職業的な経験から，現代の都市や大都市地域のぼう大な問題に対処すべき特異な資格をもっている」。都市地域にあるものは，その眼にあらゆる土木施設を見るだろう。道路，鉄道，橋梁，岸壁，運河等々。また直接目に触れなくても，足元の地下にはいろいろな土木施設が充満していることを知るだろう。地下鉄道，水道，下水その他もろもろのパイプライン。土木技術者はそれらの計画，設計，建設，運営，維持，修繕にたずさわっているのである。なおかつ何の討議であろうか。土木技術者は個々の施設の計画はしても「都市」の計画には参画しないのであろうか。

戦後イギリスは都市農村計画法をつくって国土全体の開発計画をつくることになった。そのため多数の計画家を教育養成する必要が生じ，計画家の資格が問題となった。それを検討した王命委員会の報告は述べている。イギリスの都市計画は在来技術手続のものが扱かってきた(調査によれば土木の教育を受けたものが最多で，建築，造園測量等がこにつぐ)。これは，これまでの都市計画というのは局部的な問題も主に扱ったからで，都市全体の問題を扱うためには，法律，経済，社会などの分野の教養をもったものの参画が必要であると。この見解は，都市計画という言葉の定義をフィジカルな範囲から拡大することを意味する。

ところで，このことがアメリカに影響をおよぼしたことは計画公務員協会の年次大会の論議などでもうかがわれる。かつて，ピッツバーグの都市計画委員会の技術者でないある課長が，「アメリカでは従前は都市計画は建築家の仕事であったが，今はちがう」と筆者に語った。イギリス流にいえば，これれまでのアメリカの都市計画はいっそう局部的な，あるいはデザイン的なことに局限されていたという風に解釈されることになる。国によって事情は違うが，アメリカにおいては，ゆとりのある街路システムが早く設定され，わが国に見るような既成都市の街路網計画や街路拡張事業などあまり見受けられず，都市計画委員会のスタッフにもこのところ土木技術者は少ないように思われるのである。しかし，かつてはニューヨークのネルソン リュイスのような有名な人もいたのである。

ところで，既往の時点では大分情勢がちがってきていると思われる節がある。交通問題が都市計画の重大因子となっている以上，交通計画に関与する土木技術者の発言は重きを加えていることに疑いはない。事実，土地利用計画から出発する最近のアメリカの諸都市の交通計画は，都市計画そのものとも見られるのである。水の問題も次第に注目を集めつつある。アメリカ同様，国民の大多数が都市域に集中しつつあるわが国では，給水とともに排水の問題も都市計画の大問題となっている。

筆者は外国のことを語りすぎた嫌いがある。他山の石ともならば仕合せである。わが国は，幸いに都市計画における土木技術者の発言はより強い。しかし範囲は限られている。わが国都市の将来を思うとき，より多くの土木技術者が深く関心をもって，より多くの発言をされることを期待する。多方面の技術者の学識と経験から出る発言は，せまい範囲のものの考えのうちを破って，全くの新生面を開くことは筆者のしばしば経験したことである。これは窮極には国民全体の福祉のために最も望ましいことなどである。都市計画は都市の望ましい将来の姿を描くものといえよう。そこに果たすべき土木技術者の役割は，都市化のはげしいわが国において特に重大である。しかしそこには二つの姿勢が考えられる。一つはおのおのの専門分野において最善の努力を尽すものであり，他の一つは専門知識を土台にして，より広い視野のもとに都市の開発計画に参画するものである。いずれにせよ，土木技術者の学識と経験が少しでも多く社会の進歩と発展に貢献することを期待したい。

* 正会員　早稲田大学教授　理工学部土木工学科 学会関東支部長